

米沢藩の実高推移と財政規模

2019年9月

加藤 国雄 ©

<目次>

1. 明治初年の米沢藩の実高
2. 1638(寛永15)年の総検地時の実高
3. 米沢藩の財政規模イメージ
4. その後の実高推移

米沢藩の実高推移と財政規模

<目的>

米沢藩の石高15万石(表高;おもてだか)は江戸時代を通しての実際の石高を示すものではない。新田開発などで増えた実際の石高を実高(じつだか)と言う。実高は年貢額の算定に用いられるので、米沢藩の財政を分析するにあたっては重要である。本研究では、米沢藩の江戸時代をとおしての実高の推移を考察する。

<要約>

- ・明治初年の米沢藩は表高14.7万石に対し、実高は表高の1.96倍、28.5万石である。
- ・1638年(寛永15年)総検地の時に、15万石域の実高は25.4万石に達していた。30万石に削封された1601年頃、米沢藩家老・直江兼続は30万石を50万石へ増収できると確信しており、水田開発を推進した結果である。
- ・15万石へ再削封された1664年には、実高は28万石となったとあり、この時すでに明治初年の実高水準に達した。しかし、1638年総検地も含め、検地は「上げ底」で実力を示すものでない。結果、農民には苛酷な課税を求めるものだった。
- ・仮に24万石を実高とすれば、年貢率30%として藩の税収は7.2万石。家臣の碌はその半分とすれば、藩の実収入は3.6万石と概算される。米1万石＝金1万両とすれば、藩実収入は3.6万両となり、他の財政史料とほぼ符合する。
- ・1700年代に入ると、米沢藩は借金体質となり財政は窮乏化する。農民への課税は苛酷さを増し、1700年頃13万人強あった米沢藩人口は1760年頃に10万人弱まで減少の一途をたどり、実高も推定20万石程度まで減少したと推察される。
- ・上杉鷹山の藩政改革を経て、1800年代に実高が実質28万石へと回復した。

明治初年の米沢藩の実高

～10万石以上の諸藩と比較する

	表高	家臣数	表高1万石あたり 家臣数	同左順位
41藩平均	25.8万石	5,398人	210人	
米沢藩	14.7万石	5,971人	406人	上より2位

- ・太閤検地(1500年代末頃)
- ・大名の格式が決まる

	表高	実高	実高／表高倍率	同左順位
41藩平均	25.8万石	34.6万石	1.34倍	
米沢藩	14.7万石	28.5万石	1.93倍	上より5位

実際の石高(内高とも)

(出所)別冊歴史読本『江戸なんでもランキング』(1987年)「藩別領地高・家臣数一覧(明治初年)」

1. 明治初年の米沢藩の実高～10万石以上の諸藩と比較する

明治政府が廃藩置県前の明治初年に行った諸調査から、全国諸藩の表高、実高、家臣数などが分かる。米沢藩が、鷹山の藩政改革を経てどんな実高となっていたのかを、他藩と比較しながら分析してみる。

表高10万石以上の47藩中、全データの揃う41藩(郷土を含み家臣数が極端に多い薩摩藩を除く)について分析する。米沢藩は米沢新田藩 1万石を含まない。

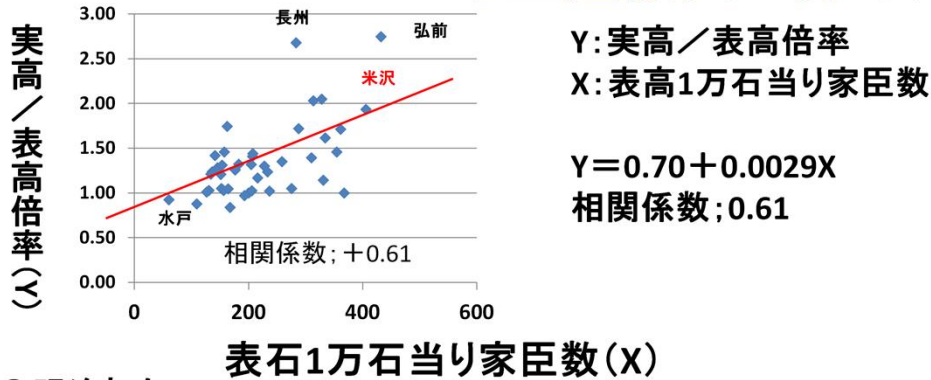
(上表より)表高あたりの家臣数;米沢藩は多いほうから2番目

米沢藩の家臣数は、2度の削封にもかかわらず江戸時代初とほぼ同じ水準を保持した結果5,971人で、表高1万石あたり406人と41藩平均210人の倍近い。

(下表より)実高／表高倍率;米沢藩は高いほうから5番目

表高に対して実高が何倍に増えたかをみると、米沢藩は1.93倍と、全国平均1.34倍を大きく上回り、上から5番目である。米沢藩が実高増加に注力したことが示される。

表石高比 家臣数の多い藩ほど 米生産拡大に努めた



●明治初年

- ・表高14.7万石に対して実高28.5万石(1.93倍)

●鷹山改革の成果はこれだ！と思ったが……

江戸時代初期にはすでに実高25万石超になっていた

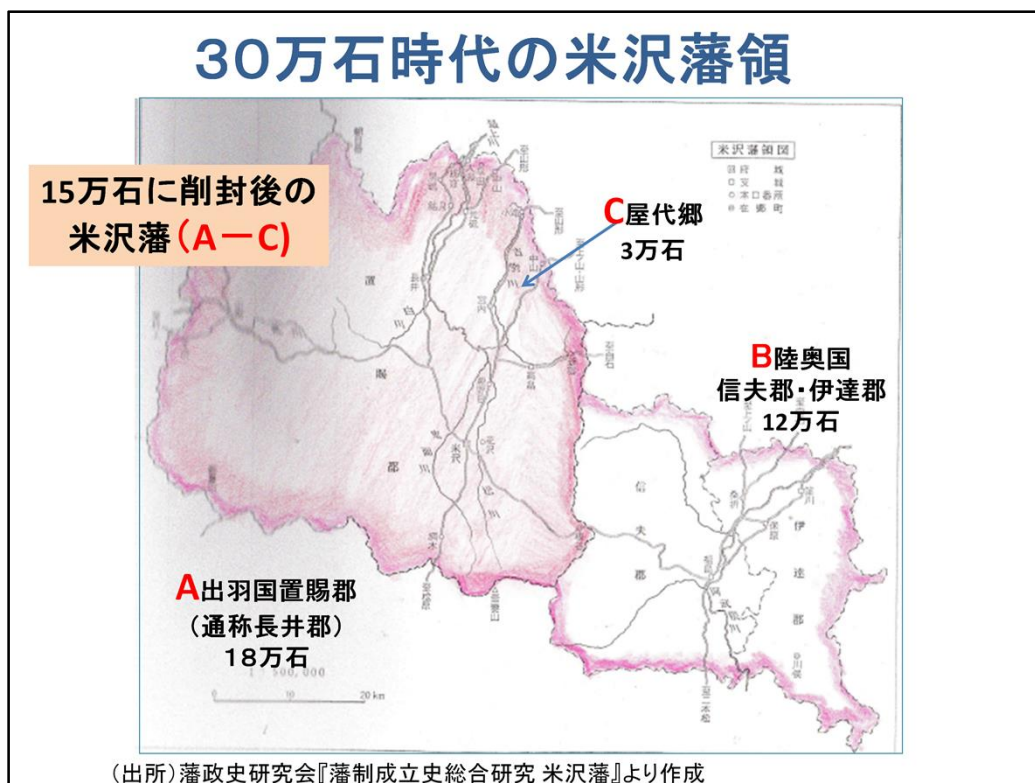
表石高比 家臣数の多い藩ほど米生産拡大に努めた

図は横軸を表石1万石当り家臣数、縦軸を実高／表高倍率として、41藩の分布を見たものである。

石高比家臣数の多い藩ほど米増産に努めたことが確認できる(相関係数が+0.61とかなり高い)。米沢藩はそれを率先したことになる。

米沢藩は15万石が実高28万石となったのは鷹山改革の成果ではないかと研究当初考えたが、江戸時代初期にはその水準に近い実高になっていた。そのことを次に示す。

30万石時代の米沢藩領



2.1638(寛永15)年総検地時の実高

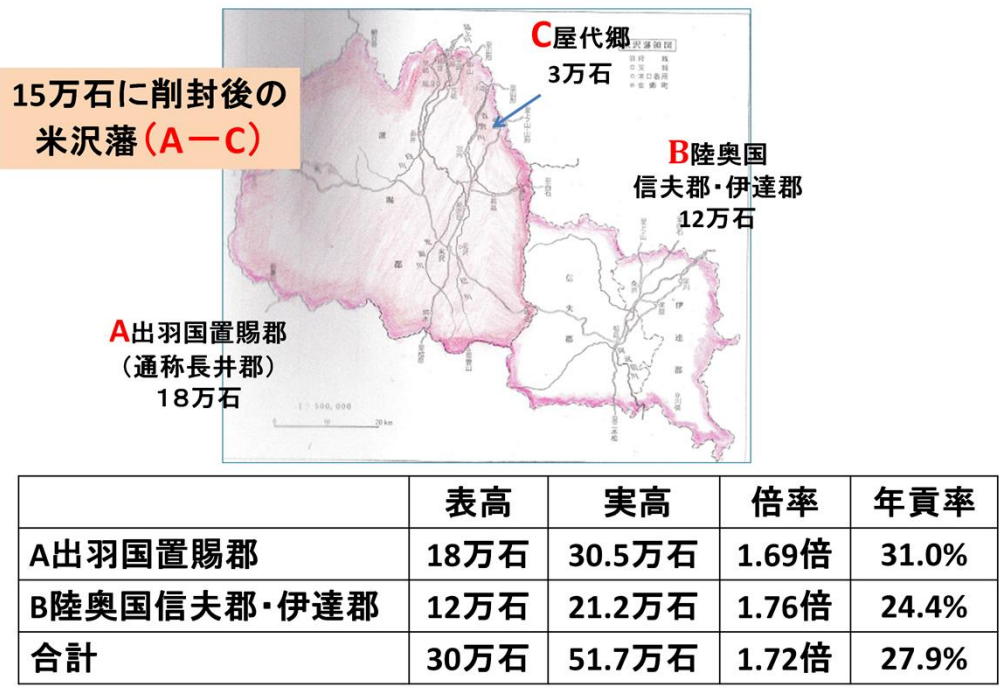
1) 30万石時代の米沢藩領図

米沢藩が30万石であった1638(寛永15)年に総検地があり、その時の実高が分かっている。まず、30万石時代の米沢藩領を理解しておく。

図は、30万石時代の米沢藩領図である。左側が米沢18万石、右側が福島(信夫・伊達)12万石である。

15万石に削封後は屋敷郷3万石の地域を外したところが所領になる。

1638年総検地時の実高



2) 1638年総検地時の実高

1638年総検地の結果は下表のとおりである。領地全体では(合計欄)、表高30万石に対して実高は51.7万石、表高比1.72倍に増加している。

領地を大きく次の2つに分けて示すと;
A出羽国置賜郡(上図30万石領地の左側、削封後の米沢藩を含む);表高18万石、実高30.5万石、1.69倍

B陸奥国信夫郡・伊達郡(上図右側);表高12万石、実高21.2万石、1.76倍

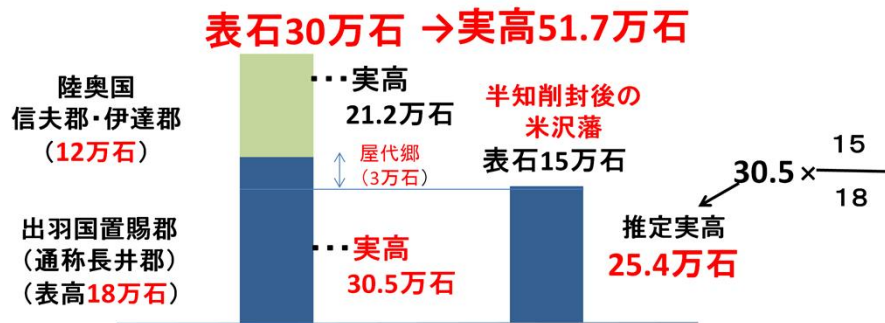
米沢藩はその後1664年15万石に削封されるが、その域の実高を次に推定するが、その域はA地域(表石18万石)から図中C地域(屋代郷、表石3万石)を除いたところである。

なお、石高とは、領地の田畠の農業生産高を米換算(石)したものであり、田畠を次のように1反あたりの石高の違いとして格付(位付)することで算定される。

<位付> 田は上田(1.5石)・中田(1.3石)・下田(1.1石)、
畠は上畠(1石)・中畠(0.75石)・下畠(0.5石)、屋敷(1石)

江戸時代初期には、米沢藩15万石域は実高25万石に達していたことを次に示す。

1638年総検地より
半知削封後(15万石)の米沢藩実高を推定すると



(出所) 石数は横山昭男1967年論文。比率は『藩制成立史研究』p.202より推定

- 1638年3代定勝の時代に、後に15万石に削封される領地の**実高はすでに25.4万石**(推定)になっていた
- 15万石に削封された1664年、実高は28万石になったとある

3) 1638年総検地より半知削封後(15万石)の米沢藩実高を推定すると

C地域(屋代郷)の表高3万石に対する実高倍率がA地域と同じとして、削封後の米沢藩(A地域-C地域)の実高を求めたのが図である。

結果、15万石削減後の領地実高は25.4万石と推定される。明治初年の実高は28.5万石の水準にかなり近い。さらに、15万石に削封された1664年の実高は28万石に達したとされる。

この検地はかなり無理に底上げされたものだったことを後にふれるが、その前に、江戸時代初期に実高が急増することになった直江兼続の改革にふれておく。

直江兼統の治世・改革

- 城下町作り
- 過大藩士の居住確保
 - ・屯田集落(藩士半農);原方衆
 - ・陪臣集落;城外に重臣の下屋敷(陪臣が開墾)
- 治水;用水路、堰、川除(堤防)
- 新田開発(後述)
 - ・兼統は、30万石→50万石化が可能とみていた
- 植林;赤松(建材として最適)→松原
- 殖産興業;特産物推奨
 - ・蒲生時代;漆・桑(蚕→真綿)・紅花・青苧がすでに特産物
 - ・兼統、とくに青苧を重視
- 離反農家対策、年貢の村総請制、「四季農戒書」
- 鉄砲の「密」造(白布)
- 1618年禅林文庫;禅林寺(現・法泉寺)に藩の学問所

(出所)渡部・小野・遠藤『直江兼統伝』など

4) 直江兼統の治世・改革

江戸時代初期に実高が急増したのは、上杉家家老・直江兼統の治世・改革によるだろう。スライドにその業績を示す。

直江兼統は120万石時代に30万石域を知行していた。その経験から、30万石を50万石まで増収できると確信していたとされる。

近世初頭の新田開発

- 1601(慶長6)年の削封(120万石→30万石)後、上杉氏は藩財政確保のため、新田開発に注力
- 最上戦役後、出陣した郷士に恩賞として、開知行(自らの開拓によって収入確保)を与えた
- つまり、**地侍的土豪層を代官や肝煎(村長)に抜擢して村方の支配にあたらせると共に、荒野を与えて開発を行わせ、それを開知行として与えた**
- これら地侍的土豪層は、新しく堰を開削し、灌漑ができるようにして新田を造成した場合には、一定の年数に渡り免祖地として認められたり、あるいは知行地として与えられた
- 近世初頭に開削された堰はいずれも**土豪層の企画によって成し遂げられた**

(出所)『米沢市史 近世編1』p.268

5) 近世初頭の新田開発

どう実高増収をはかったのか？スライドに江戸時代初(近世初頭)に水田開発をどう進めたかを示す。

地侍的土豪層を代官や肝煎(村長)に抜擢して村方の支配にあたらせると共に、荒野を与えて開発を行わせ、それを開知行として与えた。

実高増で農民は豊かになったのか？

実は「水増し」検地→藩税込優先→農民は窮乏

- ①新田開発の強行による田畠面積の増大 中農減、小農増
- ②厳密な検地による切添(田畠の地続きを切り開くこと、また切り開いた新田)の把握
- ③田畠の位付をなるべく石盛の高い上田・上畠とした→面積が変わらなくとも石高は増加

<位付> 田は上田(1.5石)・中田(1.3石)・下田(1.1石)、
畠は上畠(1石)・中畠(0.75石)・下畠(0.5石)、屋敷(1石)

- ④菱形の田・畠・屋敷でも二辺の長さを乗ずる面積の水増し
- ⑤焼畠(以前は除外した)を下畠とした
- ⑥新田の鋤下(荒地を開墾して田畠とするまでの期間)を認めず本田として検地

(出所)吉田義信『米沢藩の寛永総検地』

15万石に減封の頃(1664年)あたりには実高28万石になったとある
→1638年(寛永15年)総検地後も無理な新田開発を続けたようだ
直江兼続1620年死亡→兼続の意に添っていた施策か？

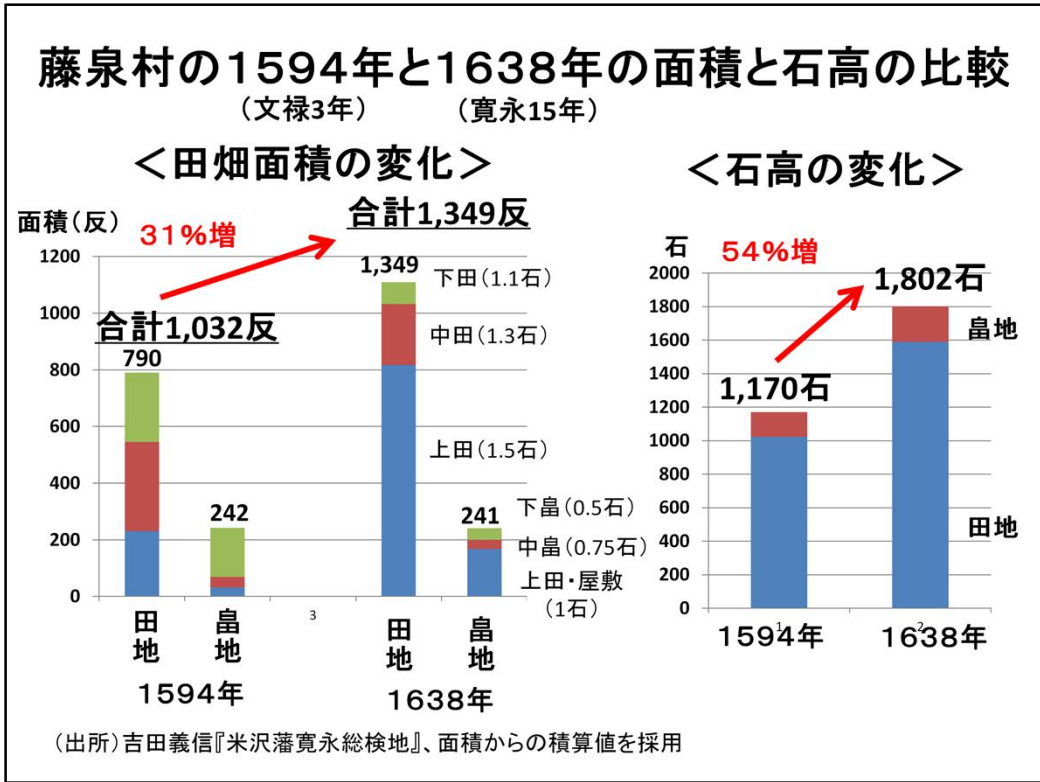
6) 実高増で農民は豊かになったのか？実は「水増し」検地→藩税込優先→農民は窮乏

話をもどして、江戸時代初の実高増で農民は豊かになったのだろうか？実は、無理な新田開発をすすめ、検地は「水増し」ないし「上げ底」で、藩税込優先で苛酷な課税により、農民はむしろ窮乏化した。結果、中農が減少し小農が増加した。

スライドに、無理な増収(実高増)をどう実現したかを示している。田畠面積を無理に増やそうとした①、②、④、⑤、⑥、田畠の格付を上げることで石高を増やそうとした③から成る。

- ①新田開発の強行による田畠面積の増大
- ②厳密な検地による切添(田畠の地続きを切り開くこと、また切り開いた新田)の把握
- ③田畠の位付をなるべく石盛の高い上田・上畠とした→面積が変わらなくとも石高は増加
- ④菱形の田・畠・屋敷でも二辺の長さを乗ずる増面積の水増し
- ⑤焼畠(以前は除外した)を下畠とした
- ⑥新田の鋤下(荒地を開墾して田畠とするまでの期間)を認めず本田として検地

15万石に削封の頃(1664年)あたりには実高28万石になったとある。1638年(寛永15年)総検地後も無理な新田開発を続けたようだ。



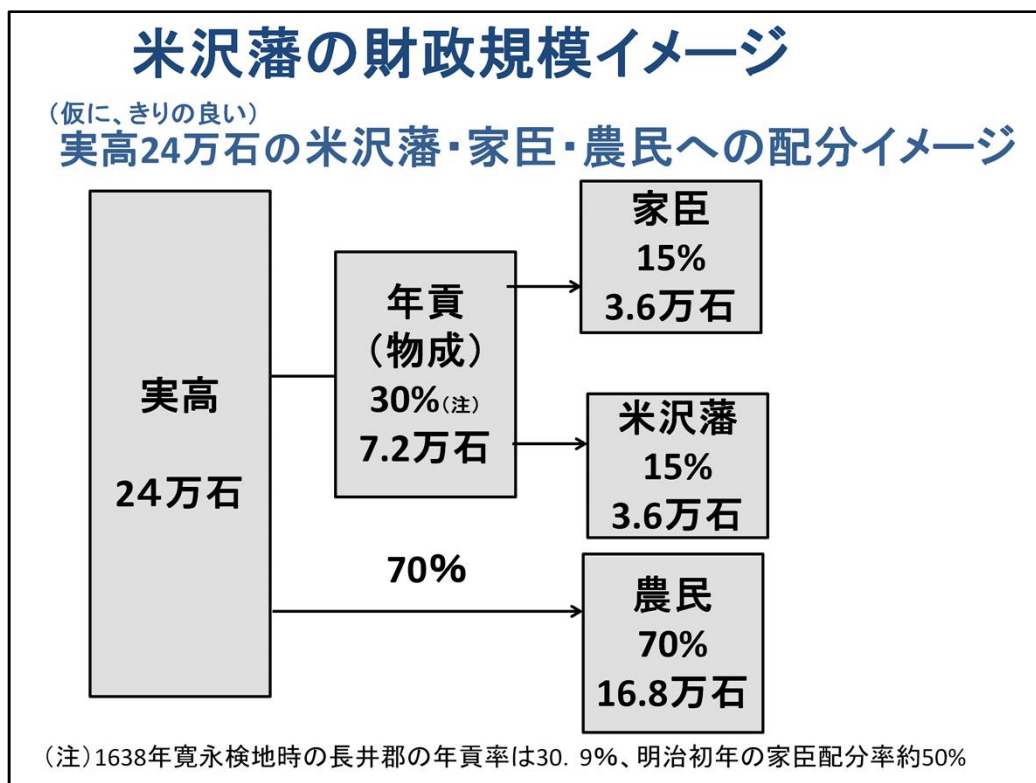
7) 検地の実際例；藤泉村の1594年と1638年の検地

検地の実際例が残っている。スライドは、藤泉村の1594年(文禄3年)と1638年(寛永15年)の面積と石高の比較である。藤泉村は現在の米沢市六郷町あたりのようだ。

左図、田畑面積の変化を見ると31%の増加だが、石高(右図)は54%増である。左図の格付(位付)構成の変化から、石高の高い格付の田畠が増えたからである。つまり、上田比率が34%から77%へ、上畠比率が11%から75%へと増えている。

石高増加の寄与率は、面積増が57%、格付上昇が43%である。つまり、石高増加の半分近くは田畠の格付を上げたことによる。

本例から、過酷な検地の一端がうかがえる。



3. 米沢藩の財務規模イメージ

1) 実高24万石の米沢藩・家臣・農民への配分イメージ

表高15万石の米沢藩の実高は、30万石時代の1738年に25.1万石、15万石に削封された頃1664年には28万石となったが、これは上げ底ないし水増しだったことを前に示した。そこで水準を下げ、仮に実高24万石とした場合の、米沢藩の税収をイメージしてみよう。1638年寛永検地時の長井郡の年貢率30.9%から年貢率30%、家臣配分率を明治初年の約50%をもとに、米沢藩・家臣・農民への配分イメージしたのが本スライドである。

実高24万石の30%＝7.2万石が年貢であり、家臣へその半分3.6万石、残り3.6万石が米沢藩のネット収入となる。農民に残るのは実高の70%＝16.8万石である。

金銭感覚の大まかな目安

現在の価値で

1石=1両=10万円

大人1人の1年間に必要な米の量

米沢藩の米価は
流通コストを考慮すれば
安いはず

	米	金	銀	銭
江戸前期	1石	1両	50匁	4000文
江戸中期			60匁	4000文
江戸後期			60匁	6500文
幕末			80匁	8000文

(出所)別冊宝島『江戸三百藩の家計簿』

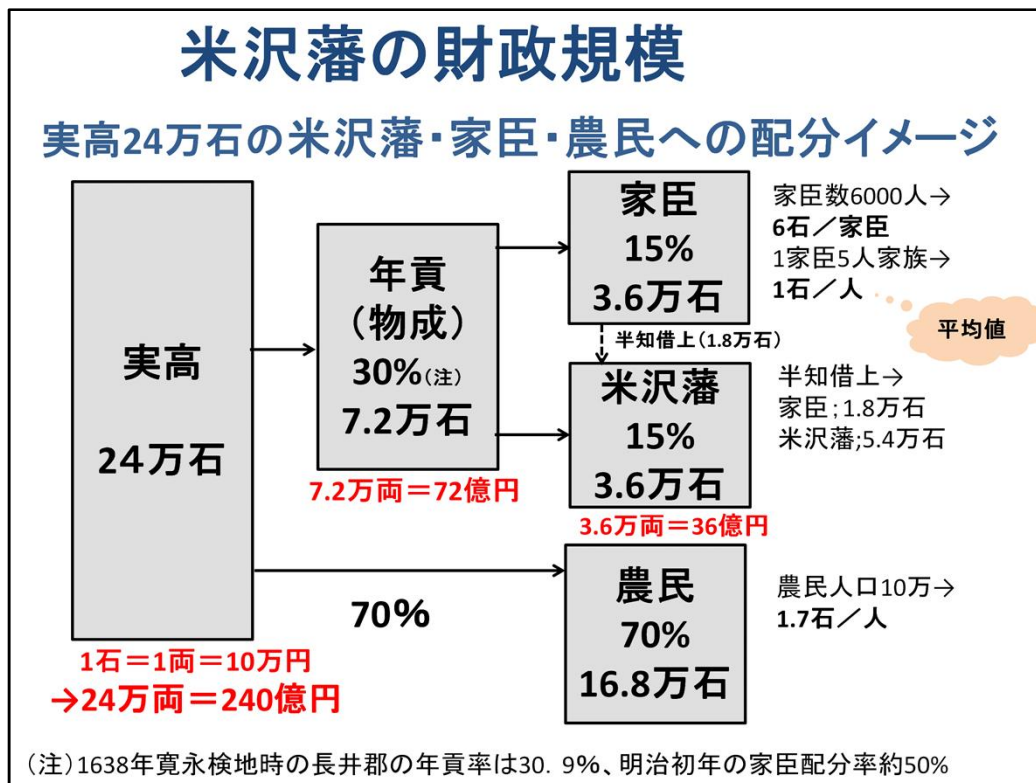
2) 金銭感覚の大まかな目安

財政面のはなしに入る前に、米の価格など「金銭感覚の大まかな目安」を提供する。

米1石は、大人1人の年間必要量とされ、金1両くらいである。当然、米価は時代・時期や地域で異なるから大まかな目安である、

現代の金銭感覚で理解するため、1両は現代の価値で10万円くらいとすると、米1万石は10億円となる。何を過去と現在を比較するかで違うが、1両=25万円とする学者もいるが、1両=10万円とする例が多いので、これを採用する。

ついでに、江戸時代は金・銀・銭の3通貨制で変動相場である。本研究では、表の交換率を採用する。



3) 米沢藩の財政規模

前スライドで示した米価の目安で、米沢藩実高の配分を改めて観察する。

(1) 米沢藩のネット収入

米沢藩のネット収入は、3.6万石=3万6000両(現代の価値で36億円)となる。実際の米沢藩の収入データと比較してもほぼ妥当な金額である。江戸・大坂などへ輸送する場合コスト高な米沢藩での米価は、凶作などの異常時を除いた平常時は、江戸など物流が活発な地域より一般的に低い傾向にあったと思われることは留意したい。

(2) 藩士の収入

藩士の俸禄=3.6万石(両)だから、家臣6000人として、家臣1人あたり俸禄=3.6万石/6000人=6石(両)/人。家臣1家族5人として(士族人口約3万人より)、家族1人あたり=6石/5人=1.2石/人

あくまで平均値なので、1石=大人1人1年分の食糧と考えれば下級武士は棒給だけでは生活維持は困難ただだろう。事実、半士半農の下級武士が多かった。また、1700年半ばになると半知借上げが恒常化(結果として返済はなく実質棒給半減)したが、一層困窮化したことになる。

(3) 農民の収入

農民の収入=16.8万石(両)。農民人口10万人として、農民1人あたり=16.8万石/10万人=1.68石/人

農業再生産のコストもこの中から捻出することになるから、それらを差引いたネット収入はさらに低い。

その後の実高を知るために

米沢藩の人口推移(17世紀末～18世紀中頃)



4. その後の実高

17世紀末から幕末までの米沢藩の人口推移が分かっている。それから、その後の実高推移を類推する。

1) 米沢藩の人口推移(17世紀末～18世紀中頃)

17世紀末に13万人強あった人口は、「宝5の大飢饉」を経た1760年の99,369人までほぼ一貫して減少している。人口減少により手余り地(耕作放棄地)が増え、1760年頃が実高最低の時期だったと想定される。

その後人口は増加に転ずるが、鷹山改革第3期初の1792年に最低の99,085人となる。そして第3期改革がすすむにつれ増加し、幕末には13万人近くとなり、前で見たとように実高は28万石程度となる。

米沢藩の身分別人口推移

西暦・年	合計		武士		農民		町人他	
	人	対1693年比	人	対1693年比	人	対1693年比	人	対1693年比
1693	132,189	1.000	31,145	1.000	87,543	1.000	13,501	1.000
1760	99,369	0.752	20,660	0.663	69,584	0.795	9,125	0.676
1850	120,638	0.913	28,115	0.903	84,737	0.968	7,786	0.577

最悪期頃(1760年)の実高推定

1693年の実高	1760年実高(推定)	
	合計人口比	農民人口比
28万石の場合	21.1万石	22.3万石
25万石の場合	18.8万石	19.9万石

2) 最悪期頃(1769年)の実高推定

人口が最低となり実高も最低となった頃と思われる1760年の実高を推定してみよう。上表に、1693年、1760年そして幕末近い1850年の米沢藩の身分別人口構成推移を示した。

1760年人口を1693年比で見れば、全体人口は0.752倍(24.8%減)、農民人口は0.795倍(20.5%減)となっている。人口減少と比例して実高も減少したとすれば、下表のように最悪期頃(1769年)の実高がイメージできる。

1693年の実高を28万石、25万石の場合について、合計(全)人口比、農民人口比で示している。これから最悪期の実高は20万石前後と想定される。農民人口比がより実情を表しているとするれば、20万石程度となる。

年貢は農家ごとに納めるのではなく村単位で納めていたから、農民減少による米収減を村全体で補おうとしただろう。したがって人口減がストレートに実高減となったわけではないだろう。このことを考慮すれば、最悪期の実高は上の水準より少し高いと思われる。

余談だが、上表の身分別人口構成の変化は興味深い。人口減少過程で、その度合いが農民(20.5%減)より武士(33.77%減)・商人(32.4%減)の方が大きいことである。財政窮乏、実高減少の影響は農民より武士・商人のほうが大きかったのだろう。

その後の幕末へ向けての人口回復過程を見ると、農民の回復度合いが武士より大きく、商人はむしろ減少している。今後の検討課題としたい。 <完>

主な参考文献

- ・横山昭男『上杉鷹山』(吉川弘文館)1968年
- ・小野榮『米沢藩』(現代書館)2006年
- ・藩政史研究会『藩制成立史の総合研究 米沢藩』(吉川弘文館)1963年
- ・渡邊與五郎『近世日本経済史 上杉鷹山と米沢藩政史』(文化書房博文館)1973年
- ・村磯栄俊『さむらいランキング』(別冊歴史読本・江戸なんでもランキング)1987年
- ・吉田義信『米沢藩の寛永総検地』(大東文化大学経済会・経済論集第38号)1984年
- ・吉田義信『置賜民衆生活史』(国書刊行会)1973年
- ・渡部恵吉他『直江兼続伝』(米沢信用金庫)1999年
- ・『米沢市史』(米沢市役所)1944年
- ・『米沢市史 近世編1』(米沢市)1991年
- ・『米沢市史 近世編2』(米沢市)1993年